ガラス絵の「顔」

三島 禎子（みしまていこ）
民族社会研究部

街を走る乗り合いバス。路線は決まっているが、停留所の看板はなく、乗降場所は何度も利用するうちにわかってくる

「乗り合いバス」。カー・ラピッドというよび名で知られる青と黄の二色に塗り分けられた乗り合いバスは、セネガルの首都ダカールの風物

創られたガラス絵市場

常設展示場のテーマ展示「セネガルの街角」には、およそ二〇〇枚のガラス絵が展示されている。一枚一枚選び出し、値段を交渉して購入したものである。一枚が数百円のものから、三〇万円相当のものまでさまざまなものが一緒にならんでいる。それらをあえて区別しないのは、ガラス絵が生活の楽しみとして人びとに受け入れられていたという経緯を意識したためである。

ものにはいろんな「顔」がある。たとえば食器ひとつをとっても、生活の道具としての器から、うるおいや楽しみをもたらす生活文化のひとつとしての器、そして道具としての用途を失った装飾品や骨董品、さらにその希少価値ゆえに売買されるもの、などさまざまである。ガラス絵の背景にもこのような変遷がきざまれている。

民博でガラス絵を収集することになったきっかけのひとつは、あるフランス人収集家からもちかけられた、ガラス絵のアンティークを買い取ってくれないかという話だった。D氏はセネガル滞在中にガラス絵を買い集め、欧米各国で数々の展覧会を開催した。このようなフランス人は彼ひとりではない。セネガルを植民地としていたフランスは、セネガル独立後も国家建設のアシスタントという名目で多くのフランス人をセネガルに派遣していた。そのようなフランス人のなかに、セネガル人の家庭で埃まみれになっていたガラス絵をもらいうけたり、新しい作家を援助したりする収集家が現れた。彼らは掘り出し物を発掘したことによって自ら美術市場を創り出し、そのなかで収集品の価値を高めていった。

D氏と購入価格を交渉する過程で、いみじくも彼が口にした「これほど古く、めずらしい作品を値切るなんてとんでもない。欲しければ一〇〇パーセント、そうでなければゼロにしてくれ」という強気の言葉は、そのことを如実に示している。価格を値切ることは作品の価値を認めないということであり、そのような鑑賞能力のない相手に買ってもらう必要はないというわけである。

私個人は美術市場の論理に支配されたくはかったが、どれほど値切っても、あるいは無関心を装っても、博物館がガラス絵を購入するという事実そのものが、「裸の王様」に太鼓判を押すようなものであることにかわりはなかった。ガラス絵に美術的あるいは商品的価値がないというのではない。ものの価値が紙一重で虚構のものとなる美術市場という世界が、博物館の出現によってにわかに現実味を増してしまうのである。

「いくら出す？」で始まる交渉

はたしてガラス絵は美術品なのか、工芸品なのか、それとも単なる土産物なのか、あるいはストリート・アートという流行にのるものなのか、そのことを問うことにあまり意味はないように思う。どの分類にもこれといった基準など存在しないからである。

さて、ダカールの路上では民博の展示場で再現しているように、塀にぴっしりガラス絵がならべられているところがある。この場所は数軒の店によって共同で運営されている。新鋭の作家が直接出品している場合もあるし、仲買人が雑多なものを集めてならべていることもある。ここでは値段は交渉次第で決まる。美術品であろうと、工芸品であろうと、土産物であろうと、そのときの客と商人の懐具合が商品の価値を決定する最大要因となる。商人はその日、どのくらい儲けたいか、客はどのくらいお金を出す気があるかが問題なのである。買い物のあらゆる場で交わされる会話は、「いくら出す？」で始まる。ここでいくら値切ろうとも、商品の価値を侮辱することにはならない。ここは美術市場ではなく、商品市場なのである。

ガラス絵の路上販売所

路上で野菜を売る女性

お気に入りの一枚に価値あり

路上を通りかかったフランス人が、ガラス絵を選んでいる私に「まるで略奪だわね。日本人の買い漁り！」と叫んでいった。私がセネガルで購入したガラス絵は三〇〇枚以上にのぼるが、その場でフランス人が見たのはごく一部にすぎない。まさしく「買い漁り」というべき収集をしたのは指摘されるまでもないが、それがより卑しめられた行為のように見られるのは、ガラス絵が単なる商品ではなく文化や芸術であるという認識があり、金に置き換えられないものを金の力で奪い取ると思われるからであろう。そしてますます値段がつりあがり、セネガルの人びとには簡単に手に入らない贅沢品になってしまう。もっとも、人びとの楽しみであった生活の文化を、美術市場に流通させていったのはフランス人である。

ガラス絵には定番のモティーフが多く、有名無名の作家がそれぞれまったく同じようなものを制作することがある。価格はピンからキリまである。独特な作風をもった作家もいる。時流に乗った作家もいるし、そうではない作家もいる。これらすべてをあえて一堂にならべることによって、博物館と美術市場の相反する関係から少しは自由になることができる。外から与えられた価値に左右されることによってガラス絵の「顔」が変わってきたことを意識しながら、お気に入りの一枚を見つけてもらえたらと願っている。

モール・ゲイ作「バンバと天使」。ムリッド教団の創始者アハマド・バンバには、森羅万象を治める力を崇めるエピソードが多い